おべっさん

獅子舞 雑考

オベッサン（えびす）の舞

作成／2022年/12月/22日（初版）
2023年/04月/12日（2版）
協力／法土寺町獅子舞保存会
法土寺町自治会

目　次

1. 獅子舞のはじまり
(1) 日本の獅子舞の起源はインド？中国？　1
(2) 謎に満ちたネパールの獅子
(3) 朝鮮半島で日本の獅子舞の原型ができた
(4) 獅子舞が日本上陸！612年に奈良に伝来
(5) 特徴は、悪魔払いの儀式
(6) 越中獅子の伝統
(7) 獅子舞の形態
(8) 県内の獅子舞は5つに分類される
(9) 能登獅子について

2. 獅子舞用語　7
(1) 獅子ごろし
(2) 天狗
(3) 三番叟（サンバサとも）
(4) きりこ
(5) 何故、獅子と天狗・三番叟・きりこの組み合わせなのか1
(6) 法土寺町獅子舞曲目リスト（一例）
(7) 法土寺町獅子舞囃子方継承写真報告

3. 新湊「ボンボコ舞」　13

4. 新湊地区の獅子舞　14

5.参考資料01　15
(1) 第5回富山県民生涯学習カレッジ／
「えべっさんがござった」「海の祭り」／漆間　元三
(2) ぼんぼこ祭り（新湊市）
(3) えびす祭り（黒部市）
(4) えびす祭り（入善町）
(5) えびす迎え（魚津市）

6. 参考資料02　21
第1回　日本海学講座「北前船の伝承を探る」1999年度
(1) 北前船
(2) 対談要旨
(3) 対談関係資料1
①弁才船（べざいせん）・ 北前船について
(4) 対談関係資料2
①新湊めでた

7. 獅子舞記録写真集01　25

8. 獅子舞記録写真集02　26

9. 編集後記　27

「獅子舞」雑考

1. 獅子舞のはじまり

(1) 日本の獅子舞の起源はインド？中国？

獅子舞の起源は一説によると、紀元前3世紀のインドにあると言われています。
当時、インドを統一したアショーカ王は、戦いで多くの犠牲者を出したことを悔いて、仏教をインド全土に広めることにしました。そこで作ったのが、「アショーカ王の石柱」です。

アショーカ王の石柱

Capital of inscribed Asoka pillar at Sārnāth.
(A. S. photo.)

この石柱には一部、獅子が彫られているものがあり、これが獅子に関する最古の記録となっています。インドにはライオンが生息しており、昔から霊獣として崇められていたようです。

これが、中国に伝わって仮面舞踊に取り入れられ、朝鮮半島を伝って日本に来たという説があります。仏教において獅子は、仏の威厳を表すものだったと言えるでしょう。

一方で、中国における獅子に関する記録は、紀元前2世紀に遡ります。当時は漢の武帝の時代（紀元前161年）で、シルクロードが開通したため、西域から多くの珍しいものが伝えられました。

その中に獅子（ライオン）がいたようで、武帝はそれを自らの宮殿の近くで飼っていたようです。ライオンをペットとして飼っていたとはビックリですね。
ここで言う西域とは、西アジアの広い地域を指す言葉ですが、その中でも現在の新彊ウイグル自治区クチャ県にかつて存在した「亀茲（キジ）国」から伝えられた舞楽が、日本の獅子舞の原型になったという説もあります。

マハーカーリーピャクン象

(2) 謎に満ちたネパールの獅子

さて、インドと中国どちらが獅子舞の起源なのでしょうか。詳細は謎に包まれていますが、両国に挟まれたネパールの記録について考察することは、その1つの手がかりになるかもしれません。

ネパールの仮面劇で「マハーカーリーピャクン」というものがあるのですが、そこには女神マハラクシュミの乗り物として獅子が登場します。

これを手かがりに獅子の起源に関する研究をした人物がたくさんいて、金蘭姫（キムナンヒ）という人の論文によればネパールのネワール族がチベット経由で中国と交易を行っており、中国から獅子の文化を輸入したのではないかとのこと。また、ネパールの獅子のたてがみが五色であることから、中国の陰陽五行説に影響を受けていると考えた馬場雄司という人物もいます。

何れにしても、伝来経路はインド→ネパール→中国ではなく、中国→ネパールという経路があったことは否めません。

人は「仮面を身に着けることによって、自然と向き合い、神や精霊といった目には見えない存在と通じ、物語を演じる表現者となりました。仮面は、肉体と意思をもつ人間と、それを取り巻く世界の境界に位置します。

人は動物や精霊や神々、そして物語の登場人物を模（かたど）った仮面を纏い、時に音楽やリズムとともに踊り、舞い、それと一体化することによって、我と仮面（=他者）という両者の力を併せ持つ存在となって、未知なる時空の扉を開こうとしたのです。

それぞれの土地の特質や文化を背景に、人々の様々な願いが反映された仮面たちは、溢れる想像力に満ちたユニークなかたちや素材、スケール感によって生み出されてきました。います。

(3)朝鮮半島で日本の獅子舞の原型ができた

何れにしても、獅子舞は中国で大きな発展を遂げたのは間違いないようで、唐の時代(618年~907年)には貴族も、軍隊も、民衆も、みな獅子舞を舞って楽しんでいたようです。しかし、それ以前に獅子舞は朝鮮半島にも伝来していました。

韓国の最も古い歴史書「三国史記」によれば、552年に干勒(ウルク)という人物が当時朝鮮半島にあった新羅という国に亡命して、そこで舞を伝えたとされています。
それを元に北青獅子という韓国独自の獅子舞が作られたという説があるようです。中国で獅子が流行る前に、韓国で獅子舞は舞われていたのですね。

(4)獅子舞が日本上陸！612年に奈良に伝来

歴史書「日本書紀」によれば、日本に獅子舞が伝来したのは612年です。朝鮮半島の百済より味摩之(ミマジ)が伝えたとされており、現在の奈良県で普及を行なったとのこと。

「奈良国立博物館」御冠残欠/赤漆六角小櫃/紫檀槽琵琶/伎楽面獅子」

「奈良の歴史」は仏教なしでは語れない、と言っても過言ではないでしょう。 仏教伝来は、6世紀の中頃(538年)とする説が有力です、欽明天皇の時に、百済の聖明王が仏像と経典を遣わしました。

最初は向原寺や土舞台という場所で子供達に教えていたようです。全国に獅子舞が普及するきっかけになった出来事は、752年(天平勝宝4年)の東大寺の大仏開眼供養式典でした。
全国から人が集まる大舞台で獅子舞(当時は技楽の形式)が行われたため、それが仏教とともに全国に伝播するきっかけとなったようです。
この時に使用された獅子の面は現在、奈良県の正倉院に保管されています。一般公開されていないようです。

ここから日本の宗教史の裏側に獅子舞が登場してくるのです。
奈良から日本全国に獅子舞が広まったのには、日本の宗教史における幾つかの大きな出来事が関わっています。
東大寺の大仏制作には260万人もの人々が関わっており、建造費は現在のお金に換算すると4657億円が投入されたとも言われています。
奈良時代の日本の人口は約450万人だったと言われており、人口の半数以上の人がこの東大寺大仏の制作に関わっていたことになるのです。

大仏は9年かけてようやく完成。開眼供養には全国から1万人以上の参列者が来たという盛況ぶりでした。そこで、獅子が登場する仮面劇が大々的に披露されたため、それを見て感動した人々がまず全国各地に獅子を伝えたと考えられます。

その後、平安時代の律令制の下で、仏教界に新たな動きが生まれます。
共同体の首長や豪族が私的所有地を持つようになったため、公的な日本古来の神祇信仰(じんぎしんこう)が行き詰まり、個人の新たな精神的支柱である仏教へのニーズが高まったのです。それに加え、僧は重税を逃れられたため、仏教を求める人が増えました。

それに応えるべく遊行僧が現れ、全国各地で神宮寺の建立を勧めることで仏教を広めたようです。その際に歩きながらお経を読む「行道(ぎょうどう)」が行われ、そこで木製の獅子の頭部をかたどった獅子頭が使用されたため、芸能文化における獅子が広く認知されました。

またこの時代は神仏習合により神社と寺院が接近したこともあり、鎌倉時代には伎楽の仮面劇に使うための獅子頭が神社に保管された記録も多数存在します。しかし、この伎楽における獅子は鎌倉時代以降に衰退してしまいました。

「江戸時代」浮世絵に描かれた獅子（喜多川歌麿作）。出典:メトロポリタン美術館

室町時代以降には、今の獅子舞の原形となる芸能が生まれました。
それが伊勢太神楽（いせだいかぐら）です。

現世に失望した人々が来世の幸福を願い伊勢神宮を中心としたお伊勢参りを盛んに行いました。

このお伊勢参りを広め、参拝者を接待したのが御師（おし・おんし）と呼ばれる人々です。御師は各地でお伊勢参りを広める際に、伊勢太神楽によって厄払いを行いました。

「江戸時代」浮世絵に描かれた獅子（喜多川歌麿作）

その際に獅子舞を舞ったようです。江戸時代には世の中も落ち着き、現世利益や旅行を目的にお伊勢参りをする人が増加して、最盛期には年間400万人以上が参拝したという記録も残っています。

お伊勢参りの広まりとともに、獅子舞も広まったと言えるでしょう。
※（御師（おし/おんし）とは、特定の寺社に所属して、その社寺へ参詣者を案内し、参拝・宿泊などの世話をする者のことである。 特に伊勢神宮のものは「おんし」と読んだ）。

またこれと同時に、御師に加えて神楽師という職業も生まれ、獅子頭を御神体に神輿を担ぎ全国各地に獅子舞を奉納する人々も現れました。

更に山伏が獅子舞を権現様と称して各家の土間で披露することもあったようです。御師や神楽師は西日本を中心に活動していたのに対して、山伏は主に東北で活動しました。これら一連の流れから、主に江戸時代以降に今の原型である獅子舞が成立して普及したと言えるでしょう。

歌川国貞画。江戸時代

このように、獅子舞は長い歴史を経て、仏教や神道とともに日本全国に広まりました。

元をたどればインドのライオンに行き着くものの、日本でも長い歴史を経て固有の芸能文化として定着したとも言えます。

この壮大な歴史があったからこそ、ライオンがいない日本でも獅子舞が普及したのです。
この歴史を踏まえて獅子舞を見ることで新しい発見をしたり、壮大な歴史へのロマンを感じたりできるかもしれません。

獅子舞はさらに日本全国に伝わりました。獅子舞は日本で最も数の多い伝統芸能とされており、2000年代の調査によれば約8000もの地域で実施されています。

厄払いや豊作祈願の目的で祭りなどに取り入れられ、人々の暮らしに浸透してきたのです。
日本各地で、正月やお祭の時に行われる、獅子頭を頭にかぶって舞う民俗芸能の事です。

現在では日本全国地方によって様々ですが、主にお正月などの縁起の良い日に行われます。
疫病退治・悪魔払いをするものとして大衆に広く信じられています。

(5)特徴は、悪魔払いの儀式

日本での獅子舞の始まりは、16世紀初め、伊勢の国で飢饉〔ききん〕、疫病を追い払うために獅子頭を作り、正月に獅子舞を舞わせたのが始まりといわれています。

その後、17世紀に伊勢より江戸へ上り、悪魔を払い、世を祝う縁起ものとして江戸に定着し、祝い事や祭り事で獅子舞いが行われるようになりました。

獅子舞が日本の各地に急速に広まったのは、室町時代から江戸時代の初期のころに、「江戸大神楽師〔えどだいかぐらし〕」、「伊勢大神楽師〔いせだいかぐらし〕」と呼ばれる団体が全国を獅子舞を踊りながらまわり、悪魔払いをしたのがきっかけであると言われています。

その頃、日本列島に生きる民たちは、縄文の猪送り、アイヌの熊送り、東北の鹿踊り等のように、動物を大自然の神として敬う精神文化を既に持ち、さらにお祓いの人生観とも結びついて、獅子舞を日本独特の文化へ熟成させました。

16世紀初め頃、伊勢の国では飢餓や疫病を追い払うために獅子頭をつくり、獅子舞を奉納したと言われています。

八尾地区の獅子頭

(6)越中獅子の伝統

富山県では、江戸時代の中期まで、獅子舞は神輿の渡御（とぎょ）の露払い役として一部の村で奉納され、明治時代に入ると庶民の芸能として隅々の村々まで浸透しました。

また、富山市八尾地区では、室町時代につくられた獅子頭が見つかっており、年の明らかな獅子頭としては、のものです。（県指定有形文化財）が、富山県では多くは春祭りか秋祭りに獅子舞が演じられます。

春は雪解けとともに始まる農作業での豊作を祈念して、秋は五穀豊穣に感謝して、賑やかな獅子が神社に奉納され、家々をまわります。

富山市八尾コミュニティセンターに保管されている。カツラ材の獅子頭と、胴体を表す布からなっている。

獅子の頭の口の中に墨書がされていて、「越中婦負郡西野積野谷　七社権現御獅子　文明一三年四月一一日」とあることから、室町時代の1481年制作とわかる。素朴でおおらか、力強い造形である。

富山県の獅子舞は数も種類も多く、地域によって舞い方や演目も違います。住民は獅子を持つ頭持ち、胴幕を支える獅子方、舞を舞う獅子あやし、笛や太鼓などの囃子方などの役割を分担し、それぞれの地域に受け継がれる伝統の獅子舞を大切に、地域の宝として守り伝えています。

射水神社獅子頭

富山県最古の獅子頭　高岡市古城の射水神社（松本正昭宮司）は、新天皇即位と改元を記念し、5月1日の高岡御車山（みくるまやま）祭で山車を先導する源太夫（げんだい）獅子の初代獅子頭を同日限定で披露する。

（室町時代1300年～1500年）作成

(7)獅子舞の形態

富山県の獅子舞は大きく分けて、「百足（むかで）獅子」と「二人立ち獅子」に分類されます。百足獅子は 「カヤ」と呼ばれる胴幕の中に人が何人も入って行われる全国的にも珍しい獅子舞の形態で、県西部地方で多く見られます。

一方、二人立ち獅子は、二人で行われる日本の伝統的な獅子舞の形態で、県東部地方で多く見られます。この他に、中世からの流れを汲む「行道（ぎょうどう）獅子」という古い形態の獅子舞も見られ、バラエティに富んだ獅子舞文化が継承されています。

県内では各地で獅子舞が伝承され、暖かな春の訪れとともに、春祭りの季節が到来!!　県内各地の集落では、笛や太鼓のにぎやかな音とともに獅子舞が披露される。

県内には、春祭り、秋祭りに披露されるものや、休止中のものを含めて、獅子舞が1,170件も伝承されており、富山は全国屈指の“獅子舞県”だ。
さて、富山県教育委員会が昨年度から行っている「とやまの文化財百選事業」で、このほど県内111件の獅子舞が「とやまの獅子舞百選」として選定されました。

「とやまの文化財百選事業」は、地域の宝として親しまれている身近な文化財を対象に、郷土の誇りとして後世に保存・継承すべきものを選定する事業。県が独自に地域の文化財に焦点をあて、顕彰する試みは全国でも珍しく、昨年度は「とやまの土蔵百選」を選定している。

獅子舞の百選選定にあたっては、(平成17年度実施)
①歴史的、民俗的に価値が高いもの。
②古くから地域住民に親しまれ、保存・継承状況が良好なもの。
③地域的特色が顕著で、地域や本県を代表するもの。
④地域住民や保存団体等の熱意により、復活・再生したもの。
⑤地域の活性化イベント等に活用されているもの。
これらの 1つに該当することを基準に選定作業が進められた。

県教育委員会では、選定した獅子舞に選定証を交付し、百選を網羅したガイドブック『とやまの獅子舞』を発行する。A5判、64頁の中に富山の獅子舞の歴史や変遷、種類や特徴、見どころ、選定された獅子舞の写真や解説、獅子舞百選マップなどを掲載。4月には、県内市町村の教育委員会や博物館・美術館、獅子舞保存会の関係者などに配布する予定だ。

(8)県内の獅子舞は5つに分類される

県内の獅子舞は、前足・後ろ足の二人立ち獅子と、胴幕の中に5～6人が入る百足獅子に大きく分けられ、県東部では二人立ち獅子、西部では百足獅子が多く見られる。

更に、二人立ち獅子は金蔵獅子と下新川獅子、百足獅子は氷見獅子、砺波獅子、射水獅子に分類される。獅子舞百選では、百足獅子が76件と多いのが特徴だ。

法土寺町獅子舞

金蔵獅子では、牡丹や唐草模様の胴幕に、巻毛模様の袴の獅子と、その獅子をあやす武者姿の金蔵、烏帽子に水干姿の三番叟(さんばそう)、ササラ、天狗などが登場する。下新川獅子では、大勢の天狗が獅子あやしとなり、刀や傘、酒樽を採り物に悪魔払いやシシオコシなどを演じる。

氷見獅子は、胴幕の中に5～6人が入り、素手で幕を支えるのが特徴。笛や太鼓、鉦を使ったリズミカルな演目が多く、大太鼓を乗せる豪華な曳山のような太鼓台も登場する。

砺波獅子は胴幕に竹の輪を入れて支える大型の百足獅子で、2人1組の子どもの獅子あやしが棒や刀などの採り物を用いて、リズミカルに演じる。

射水獅子は氷見獅子のように素手で胴幕を支える。天狗や、花笠を被ったキリコと呼ばれる2人1組の子どもが獅子あやしを担当する。

とやまの獅子舞百選に選定された獅子舞をいくつか紹介しよう。
小川寺の獅子舞（魚津市・白山社、千光寺観音堂、3月12日、10月12日、1月第4日曜）は、行道獅子（神輿行列などの露払い役など）で、天狗面やお多福面を付けた獅子あやしと二人立ちの獅子が登場。神輿を先導して、千光寺観音堂をまわるなど、神仏混交の遺風を伝える行事として県指定文化財となっている。

十二町の獅子舞（氷見市・日宮神社ほか、4月第3土曜）は氷見獅子のルーツとされ、5 集落の五頭立ての獅子が勢揃いして舞を披露する。浦田山王社の獅子舞（立山町・浦田山王社、4月中申に近い土・日曜）は、全長約7m、幅約2mの胴幕の中に20名以上が入って練り歩く行道獅子で、獅子頭で新婦や幼児の頭を噛む所作を行う。
笹川の獅子舞（朝日町・諏訪神社、4月第2土曜、8月第4土曜）は獅子頭を被り、手にした刀と幣を振りながら、悪魔を払う越後型の神楽獅子に特徴がある。

とやまの獅子舞百選は、HP「富山県デジタル文化財ミュージアム」（http://www.pref.toyama.jp/sections/3007/digital/）でも公開予定。獅子舞の開催日や上演場所などを確認し、実際に富山を訪れて観賞してみるのも富山の祭り・文化に親しむ、いい機会となるだろう。

(9)能登獅子について
能登半島の獅子は、「金沢獅子・加賀獅子」に加え、テンポの速い越中の氷見獅子の流れが広まっている。越中獅子の石川県への伝播に関する調査（平成7年:富山民俗会／伊藤曙覧氏）によれば、七尾市で現在行われている獅子78カ所の中で越中獅子は、27カ所を数えることが出来ます。

近隣の鹿島町では、25カ所のうち18カ所が越中獅子とし、鹿西町では13カ所の内5カ所、鳥屋町は、12カ所の内9カ所、能登島でも15カ所の内9カ所となっています。

法土寺町獅子舞

新湊の「能登通い」の海運は、入港先である「穴水・宇出津・小木・松波」などにも越中獅子が見られます。

放生津湊からの「能登通い」は、木材・竹材・薪炭・魚類・酒などを船主が買い積みする商売であるが、人間関係が重視され、祭りや年中行事を通して信頼を深めていったと考えられます。

民事芸能の獅子舞の伝播や交流関係は、加賀・能登・越中においては、とても複雑であります。能登から伝わった獅子舞が、また能登地域へ伝わるような複雑な関係ではないかと想像します。

現在の県下で行われている獅子舞は、江戸時代中期以降に広まったと言われてはいるが、
先述したように、富山八尾町の獅子頭は、文明13年（1481年）・新湊の西宮神社の記録は、天正8年（1580年）等を見るとかなり古くから獅子舞が演じられていたことがわかります。

新湊地域には、およそ80数カ所の獅子舞があったとも言われています。芸能化された獅子舞の古いものは、江戸時代の後期の文政（1818年）の頃からと記録されています。　（新湊市史）

2.獅子舞用語

(1)獅子ごろし

獅子ごろしは、氷見の百足獅子などで祭りの最後に演じられる演目のひとつ。

霊獣で悪魔祓いをする獅子を倒してしまうのは理不尽にも思われるが、実は獅子を倒すのが目的ではなく、獅子に宿った災厄(さいやく)を祓い除くための舞いである。

獅子は最後には蘇り、災厄(さいやく)を消し去られた状態で復活する。多いもので20を越える演目の最後を飾る「獅子ごろし」は見応えがある。

(2)天狗

「天狗面を被った猿田彦役」

廣西名勝志は中国明代に書かれた地理書で日本のカラス天狗によく似ています。天狗発祥はおそらく中国でしょう。実在したかどうかは謎です。

獅子舞と天狗の関係は、人を殺して苦しめる獅子を異人が退治する話の類型ではないでしょうか？(桃太郎がその一例)。

獅子に悪を食べて退治してもらおうという願いから発生したライオンダンスの成立から考えると、元々獅子は人に害を為す悪であったが、人の代わりに悪魅を食べるという方向へ転換され、めでたい時に舞うようになったらしく、天狗と獅子の争いは、元々の獅子の性根を天狗による退治にて改心させる物語の冒頭部分を表現しているものと思われます。

「天狗と猿田彦天狗面をかぶった猿田彦役面掛行列(御霊神社)古事記・日本書紀などに登場し、天孫降臨の際に案内役を務めた国津神のサルタヒコは、背が高く長い鼻を持つ容姿の描写から、一般に天狗のイメージと混同され、同一視されて語られるケースも多い。

法土寺町の獅子舞

祭礼で猿田彦の役に扮する際は、天狗の面をかぶったいでたちで表現されるのが通例である。鼻高天狗の由来天狗の長い鼻の由来について、鼻高の天狗面と形状が類似した伎楽面の一種ではないかとする説があるが、天狗の図像学的な変遷から見て正確には鳥の嘴を表していたと考えられる。

鼻の長い天狗の描写は鎌倉時代末期から『天狗草紙』等に見られ、『是害房絵』には人間に化けた天狗が鳥(鳶)の姿に戻る際に鼻が伸びる様子が描かれている(鼻が伸びて上嘴になり下顎が伸びて下嘴になる)。つまり長い鼻は鳥の嘴の名残なのである。

(3)三番叟(サンバサとも)

元々「式三番」という名称は、例式の 3番の演目という意味で、「父尉」「翁」「三番猿楽」の 3演目を指すものであり、室町時代初期には「父尉」を省くのが常態となっていたが、式二番とは呼ばずそのままの名称が使われている。

古くは、その3番のうち 1、2番目は聖職者である呪師が演じたが、「三番叟」は 3番目の演目であり呪師に代って猿楽師が演じ、「三番猿楽」と呼ばれ、「三番三」とも呼ばれる。

三番叟の舞は、揉ノ段と鈴ノ段に分かれる。前半の揉ノ段は、面を付けず、足拍子を力強く踏み、軽快・活発に舞う。後半の鈴ノ段は、黒式尉を付け、鈴を振りながら、荘重かつ飄逸に舞う。翁の舞が、天下泰平を祈るのに対し、三番叟の舞は五穀豊穣を寿ぐといわれ、足拍子に農事にかかわる地固めの、鈴ノ段では種まきを思わせる所作があり、豊作祈願の意図が伺える。

式三番のうちでも、翁以上に後世の芸能に影響を与えた。歌舞伎や人形浄瑠璃などに取り入れられ、また日本各地の民俗芸能や人形芝居のなかにも様々な形態で、祝言の舞として残されている。
尚、三番叟の系統を引く歌舞伎舞踊や三味線音楽を「三番叟物」と言う。

「奈良豆比古神社の翁舞における三番叟」

三番叟の舞は、能・狂言のに登場します。
「『三番三・三番叟（さんばそう）』は天下泰平、を祈る儀礼曲『翁（おきな）』の後半部分です。
『翁』は、翁の面（おもて）を納めた面箱を持つ千歳（せんざい）、翁、三番三、囃子方、地謡が橋掛リ（はしがかり）から順に登場します。

翁が舞台の中央先で座り深々と礼をします。それぞれの役が着座すると、笛の独奏に続き、3丁の小鼓が勢いよく打ち出し、翁の謡が響きます。はじめに千歳がさっそうと舞い（千歳ノ舞）、その間に舞台上で面をつけた翁が天下泰平・国土安穏を祝して荘重に舞います（[翁ノ舞）]。

翁が舞台から退場すると、三番三が「揉み出し（もみだし）」という大鼓の打ち出しに合わせて立ち、躍動的に足拍子を踏みしめ力強く舞います（揉ノ段）。
続けて三番三は、「黒式尉（こくしきじょう）」の面をつけ鈴を振りつつ、はじめはじっくりと、次第に急速に舞い納めます（鈴ノ段）。

（4）きりこ

「こきりこ」とは日本の民謡「こきりこ節」（こきりこ踊）などを歌って踊る際に用いる民俗楽器である。漢字では、「筑子」と表記される。

中世にあっては、大道芸の一種で、主に曲芸をおこなった放下（ほうか）が常時携帯していた楽器であったことが知られている。

長さ7寸5分（約23センチメートル）に切った竹を両手に一本ずつ指先でつまみ、回しながら打ち鳴らして踊り歌う。太さはおよそ1センチメートルである。

日本では中世の時代から使用され、なかでも室町時代中期以降にあらわれた放下師は常にこきりこを打ち鳴らしていた。

この「こきりこ」を楽器としてフルに活用した 民謡が「こきりこ節」である。
こきりこ節は、富山県五箇山地方のものが有名だが、ほかにも新潟県柏崎市女谷（おなだに）の綾子舞の演目にも見られる。

五箇山の「こきりこ節」では「こきりこの竹は七寸五分じゃ…」と、その長さが明確に歌われているほか、「月見て歌う放下のこきりこ…」と放下が歌われている。

放下師（ほうけし）

笹竹を背負い、烏帽子姿で歩く放下師。
室町時代・1500 年末ごろ

「こきりこ節」の伴奏に用いられる民俗楽器には他に「ささら」がある。

又、大道芸の一種である放下（ほうか）の特技のひとつとしても知られる。放下師は、こきりこを打ち合わせて拍子をとって物語歌をうたい歩き、あるいは辻に立って歌い、特に子女からの人気を集めた。

(5)何故、獅子と天狗・三番叟・きりこの組み合わせなのか1

「獅子は、霊獣として悪霊を鎮めてくれる神の使いと考えられてきました。」
獅子舞に登場する役者は、どうしてこの組み合わせになったのか！
結論から言って分からないとしか言いようがありません。

しかし、先述したように、獅子舞の起源と仏教伝来とは、奈良東大寺大仏建設開眼供養となると、この時代の「猿楽・能・狂言」の歴史的背景と重なります。

現在では、歌舞伎や文楽と並ぶ伝統芸能の一つとして知られる能・狂言。実は、その歴史は歌舞伎よりも古く、能・狂言の源流をたどると平安時代、奈良時代にまで遡ることができます。

例えば、お能「石橋」という舞の中に、「獅子・童子」が登場してきます。
「お能にはいろいろな演目があり、かつては上演する順番が決まっていました。

能楽の生みの親である世阿弥が、序破急（じょはきゅう）と呼ばれる三部構成の概念に沿って順番を5種類に分けました。序破急では、「序」は導入で誰にでも分かりやすい演目を、「破」は転換で技の見せ所、「急」は最後に驚かせるような派手なものが良いとされています。

能「石橋」獅子

そして後世になると、“翁おきな”を始めとしてお能を五番、その間に狂言を演じるのが正式な流れとされ、この流れは「五番立ごばんだて」と呼ばれるようになりました。

「紅白の獅子が数匹登場し、全身を使って舞い踊るおめでたい演目であるお能「石橋」。中国から伝わってきたお話で、読み方は「いしばし」ではなく「しゃっきょう」です。

石橋はお能のどの流派でも大変重い習いとして扱われており、師匠の許しが無ければ舞う事が許されません。

それは、獅子の動きが普通の能の型に当てはまらず、また獅子にはセリフが無いため、演者の表現力や技術、そして体力も問われる演目だからです。」

「石橋」の見どころは、何といっても美しい獅子の舞です。獅子は1匹の時もありますが、ほとんどが紅白の複数匹で登場します。紅白の場合は、白が父親の獅子で堂々とした舞、赤が子供の獅子で生き生きとした躍動感にあふれる身軽な舞です。

能「石橋　文殊菩薩・獅子舞」

父子ではなく兄弟とする場合もありますが、白獅子の方が年長者の風格があり、どちらも石橋でしか登場しない大変珍しい型（動き）ばかりなので、一見の価値があります！

「紅白の獅子」を実の親子で演じる場合もよくあり、人生の節目を記念した大変おめでたい上演でもあります。

「獅子とはどんな生き物？獅子は百獣の王ライオンの意味もありますが、お能「石橋」の獅子は仏教の世界に出てくる空想の生き物で、中国にあるとされる清涼山に住んでいる神聖な霊獣です。
「文殊菩薩は、釈迦如来の脇侍（きょうじ）であり知恵を司る仏様です。」

文殊菩薩

獅子は文殊菩薩の乗り物で、上に乗る文殊菩薩を守る守護獣でもあります。
そんな仏様を守る獰猛どうもうな獅子にも、実は苦手な物があります。
それはなんと”虫”！なぜならフサフサとした毛に住み着く毒虫に刺されると、獅子は命を落としてしまうからです。

しかし、毒虫は牡丹の花の朝露に濡れると死んでしまうので、獅子は牡丹の花の下では安心して休む事ができるのだとか。（※朝露を飲んで解毒するという説もあります。）

獅子に牡丹（首里城）

このことから、獅子と牡丹の組み合わせは、最強でありとても良い組み合わせとされてきました。

慣用句『獅子に牡丹』とは、「大変豪華な牡丹の花と獅子で、非常に良い組み合わせ」という意味なのです。

お能「石橋」演目順序		
1	翁	最初に演じる。
2	初番目物	脇能。神様をシテとし祝言性の強い作品。例）高砂、竹生島、玉井
3	二番目物	修羅能。死後に修羅道へ落ちた源平の武士をシテとする。例）清経、頼政
4	三番目物	鬘物（かずらもの）。髪飾りを付けた綺麗な女性や、老婆、桜。の精霊などをシテとした作品。例）井筒、松風、羽衣
5	四番目物	雑物。人間世界での出来事。思い人を求め彷徨う（さまよう）　物狂能や 戦場。の斬合物、執念や復讐、怨霊などさまざま。 例）葵上、道成寺、隅田川など多くの演目がここに分類され
6	五番目物	切能。最後＝切に上演される。鬼や天狗など異類の者をシテとする作品。比較的短く、速いテンポの派手な曲。例）石橋、鞍馬天狗、紅葉狩」
「お能「石橋」の登場人物」 前シテ（主人公）:童子後シテ（主人公）:獅子ワキ（脇役）:寂昭法師」		

法土寺町獅子舞

(6)法土寺町獅子舞曲目リスト(一例)

内容ににについては、演目・舞の踊り方から連想したもの。

演　　目	内　　容	
①大廻り	藪から獅子をおびき寄せるため、天狗が遠くから呼んでいる仕草が入る。獅子が左右に動き回り、様子を見ながら天狗に近づいていく。	
② スズガラ	近づいた獅子の気を静めるため、キリコが鈴で遊ぶ様子。	
③ジュウシ	サンバサが、獅子に「飲み込んでいる悪霊」で辛いのではないでないか尋ね」この刀で追い出してやるぞと言い聞かせ、サンバサは、左右に刀を振り下ろす様子。	
④在郷(ザイゴ)	悪霊を追い出したら、農家の皆は、「穀物が豊かに実り、五穀豊穣」となり大喜びたと踊る。	
⑤オベッサン(えびす)	また、安全に漁が出来、大漁となれば、漁民の皆は大喜びたと踊り、釣る動作が入る。最期に釣り竿が弓に変わり、悪霊を追い出す。	
⑥目録向上フタツブシ	祝儀御礼・家内安全・商売繁盛を祈る。	
⑦廻りスズガラ	なかなか用心して、全部の悪霊が出てこないので、再びキリコのスズガラで緊張をほぐして、廻りながら獅子を誘い込む。	
⑧長刀(ナギナタ)	最期の悪霊が顔を出してきたので、天狗・サンバサは、協力し長刀と刀で成敗する。	
⑨キリコ	飲み込んだ悪霊を成敗してもらった獅子は、キリコと共に喜び踊る。	
⑩葉オチワ(扇)	また、獅子は大変喜び、サンバサ・天狗は、葉オチワで「良かった」と葉の扇で「幸せの風」を贈る	
⑪ハッタハッタ	家の中に入る。 家内安全・商売繁盛・豊漁・豊作を祈る。	
⑫カマ	最期は、カマで切り終わる。	
⑬シシゴロシ	上記一連の舞を「酒樽・米俵」使って舞う。	
悪霊とは、災厄のこと。「ふりかかってくる不幸なできごと。わざわい。災難。災禍。厄難(やくなん)。・		

(7)法土寺町獅子舞囃子方継承写真報告

法土寺町獅子舞囃子方　1	法土寺町獅子舞囃子方　2
法土寺町獅子舞囃子方　3	法土寺町獅子舞囃子方　4
法土寺町獅子舞囃子方　5	法土寺町獅子舞囃子方　6
法土寺町獅子舞／囃子殺しの舞　1	法土寺町獅子舞／囃子殺しの舞　21

法土寺町獅子舞

3.新湊「ボンボコ舞」

ボンボコ舞は、「大和舞・恵比寿舞」ともいわれ、仮面をつけて舞う素朴な物であります。新湊の西宮神社（本町）の旧記によると、「天正8年（1580年）神保安芸守氏張が社殿を再興し、4月20日に遷座、爾来例祭日とする」とあります。

この例大祭に「ボンボコ」が舞われる。例祭は、社殿での神事の後、大道式（舟幸祭:しゅうこうさい）といわれる海上神事と、氏子の網元や船主で行われる氏子神事があってそれぞれの場で舞が行われる。

ボンボコ舞「舟幸祭」

舞人の衣装は、袖長の江戸紋衣を赤襦袢の上に着て、白衣で襷（たすき）をして後ろで蝶結びを作り、それに神の使いを表す御幣を結ぶ。

胸に恵比寿の蔦柏紋（つたかしわ）を縫い付けた胸当てをして、袴は、野袴で、裾を紐で結び脚絆をつけ、白足袋に草履を履く。

手には、腕のついた黒繻子（しゅす）の手甲をする。

頭には、黄金の冠をかぶり、長い髭の黒光りする修祓貴面をつけ、背帯爵吼（はいたいしゃっこう）の鬼面を腰当面をする。

採物は、黒漆塗り仕上げの弓（長さ2m）を手に持ち、6本の矢を箙（えびら）に納めて背負い、腰に大小の刀を佩く（はく）。楽器は、大太鼓、節長の竹に籐を巻いて漆仕上げをした横笛、海運寺（神仏分離令で廃寺）の修験者の法螺貝を使う。

箙（えびら）とは、. 矢を入れて肩や腰に掛け、携帯する容器のこと。 矢筒。「やなぐい」とも読む。靫（うつぼ、ゆぎ）とも呼ばれる。

芸能は、氏子神事の場合、狩衣修験者風の法螺貝吹奏者3～4名、太鼓2名、横笛3名が奏でる「オベッサン囃子」に合わせて、玄関前で勇壮な舞が始められる。

舞が始まると、紋付き、袴の脇役4～5名が「ササラ:青竹」で玄関の地面を打って魔を祓う。
その後、家の腰板、格子（サマムスコ）を打って「入ったぞ、入ったぞ」のかけ声とともに、魚を家の中に追い込むしぐさをすると、舞人が土足のままで家に入り、大漁を祈って舞をする。

人々は、その土足の汚れがひどいほど豊漁で縁起がよいと喜ぶ。舞は、弓を釣り竿に見立てて、左右左と釣りの仕草をする。

次いで弓に矢をつがえて、四方をにらみ悪魔を狙って右上の隅に矢を放ち、最後に抜きはらった小刀で大刀の鍔（つば）をたたき「ガチャ、ガチャ」と鍔を鳴らして終わるが所要時間は、6～7分である。

舞人のかぶる仮面は、癋見（べしみ:天狗面）系のもので、神輿の渡幸中は、道案内の役をし、舞の時は、季節の節目に恵比寿が漁師に大漁の祝福を与えるための来訪の役をする仮面神である。
腰当ての背帯爵吼（はいたいしゃっこう）の鬼面は、背後の魔に備えるものであろう。

法土寺町獅子舞

4. 新湊地区の獅子舞
新湊地区の獅子舞の由来や起源は定かではないが、放生津地区に伝わる「獅子舞」も「ボンボコ舞」の流れを組むものと、当然ながら思われます。

放生津の獅子舞の記録としては、「文政11歳（1828年）子8月改」に放生津八幡宮に奉納された獅子頭・道具箱に書かれたものが残っています。

これは放生津「秋葉神社の縁起」によると、和船（渡海船:帆船）の往来で盛んな頃、西国の船乗りより伝えられ「惣社放生津八幡宮の秋期例大祭の神輿渡幸（みこしとぎょ）露払いとして奉納されていたものであります。
特に「この獅子頭は、箱獅子」と呼ばれ放生津地区の元祖とも呼ばれています。
嚮導（きょうどう）の猿田彦命（さるたひこのみこと）に先立って治道（ちどう）の露払いに当たるものと言われています。（嚮導:先に立って案内すること）

新規町の獅子: 道具箱書 （射水市八幡町2丁目:秋葉神社所蔵） 箱の蓋:文政十一歳八月改／若連中:世話人:十四人作／作人:大工　作治良 箱底の記された若連中名:久々湊屋宗右衛門・桶屋一右衛門・久々江屋仁平 稲屋助三郎・作道屋弥右衛門・湊屋権五郎・片口屋十右衛門・四日屋為右衛門 谷口屋久右衛門・髙田屋力右衛門・木屋久右衛門・稲屋長右衛門・河口屋忠右衛門 （不明者1人）計14名

新湊地区には、約80カ所で獅子舞があり、保存会・若連中・自治会・神社などで管理されています。

本江5地区、七美7地区、堀岡6地区、片口4地区、作道10地区、塚原7地区、新湊40地区があります。（平成7年新湊の獅子舞:新湊市教育委員会発行）

これらの獅子舞の中には、飛騨宮川郷の金蔵獅子と呼ばれる2人獅子舞の系統が、神通川を通じて富山市北代から本江地区に伝承されています。
しかし、それ以外は全て百足獅子であり、射水獅子・能登獅子・砺波獅子の格系統が入り交じって伝えられています。

法土寺町の獅子舞

百足獅子は、長い胴幕の中に5、6人～9、11人の構成で多様であります。年代の古いものほど胴幕は長く、獅子頭も大きく重いものが多く見られます。半円形の竹輪入りの胴幕を特色とする砺波獅子の形は、塚原地区に伝えられています。尻上がりの曲が特徴とされています。

氷見・二上系の念仏擦鉦（さっしょう:すりがね）を用いるものに六渡寺の獅子があります。道化役は、六渡寺獅子舞から海辺一帯の放生津にも見られ、さらに放生津潟を通じて内陸部に入り、射水系の久々江獅子舞にも見られます。その姿からボン・スリコンモチ・オチョコなどと呼ばれています。

演目は、湊町、漁師町の新湊地区では、漁業の守護神と結びついたオーベッサン（恵比寿）や能登・氷見系のドンドコ（棒術）などが多く見られます。射水系は、キリコ（綾竹）・キセル・イクリなど優雅な獅子あやしが中心となっています。

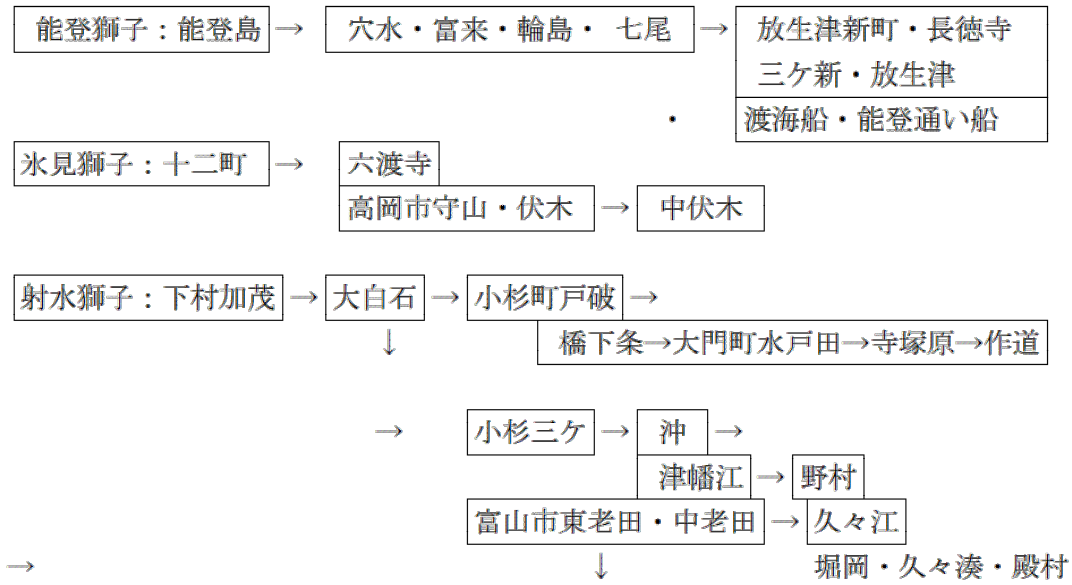
特徴的なものには、六渡寺獅子舞にタイマツを駆使するヨソブリ舞があり、燃えさかる火は万物を生み出すと言われ、他の地区にも取り入られています。

交流や伝播は、複雑であるが、奈呉の浦に面する浜辺の獅子は、俗に「浜獅子」と呼ばれています。

江戸時代の渡海船の船乗りにより、西方より伝承したとし、内陸部では小矢部川・庄川・神通川・放生津潟などに通じる大小の河川により伝播したものと思われます。

4．

新湊地区獅子舞系統図



法土寺町の獅子舞

5.参考資料01

(1)第5回富山県民生涯学習カレッジ／「えべっさんがござった」
「海の祭り」／漆間　元三

はじめに

えびす神は商売繁昌の神として、商家では信仰があつい。一升桝にあり金を入れてご馳走を供えたり、十日夷といってえびす神を祀ってある社へ詣でたりする。

しかし、この傾向は江戸時代に入ってからのことで、もともとはえびす神は漁業の神として信仰をあつめていたのである。

法土寺町獅子舞

富山湾は深海、大陸棚、海谷が絶妙に入りまじり、魚類の生息に好条件をそろえている。　また、東北に向かって広く開口しているため北方から寒流系の魚類がはいり込むばかりでなく、南からは対馬暖流にのって暖流系の魚類が流入し、これらの魚類の混交地点となっているために魚の種類が実に豊富である。

それゆえ古くから沿岸漁業が盛んで、海岸線ぞいに大きな町が発達している。氷見・新湊・四方・岩瀬・水橋・滑川・魚津・生地等、漁業または海運で早くから開けた町である。

同じ旧加賀藩でも石川県は百万石のお膝元であり、商業によって発達してきている。それに反し富山県は、藩政時代から加賀藩が沿岸漁業に気を配り、富山以東の海岸を全て浦方十村役を生地に置き、その統轄育成にあたらせていたほどである。

農業や商業は、特別の天災や異変がないかぎり、一定の実入りを予想することが可能である。しかし、漁業はそれと異なり時化や不漁となれば全くの無収入となる。
その反面、思いがけぬ大漁となり予想外の収入が舞いこむ。鯨に追われた魚群が湾内へ逃げ込み、大漁となるなどがその例である。このように予期せぬ獲物をまねき寄せる鯨をえびすと海辺の人々はよんでいる。

えびす神は、海の彼方または海底の常世の国からあらわれて、人々の生業を守護し、福利をもたらすと信じられている。では、このえびす神の根源について述べてみる。

古い時代から、海は「綿津見（わたつみ）」といわれ、「綿津見の国」を司る「綿津見の神」の信仰が存在したのである。
また、折口信夫（民俗学者）の「まれびと」の説がある。
昔の人々は海岸づたいに生活の地を求めてやってきた。そのあと海岸に村づくりした祖先が、やがて亡き数に入り、それらの人々の霊は皆、遙かな海の彼方にあり、時折、常世波に乗って、子孫の村を訪れ、幸福をもたらして去ると考えられていた。折口信夫はこれを「まれびと」とよぶ。

綿津見の神（海神）・常世の国のまれびと（祖先）、これらが混然一体となったものがえびす神である。海辺の人々は祭りにあたって、これらの神を招いて漁業の盛んならんこと、海上の安全を祈願するのである。

県内で行われている、この祭りの中には神送迎の古い形式を現在も明確に残存しているものがある。
例えば新湊の築山祭りではこの海神を迎えることから祭りが始まる。宵祭の夕方、海に向かってかがり火を焚くと、これを合図に海から海神が来臨される。

この神を舟神輿に乗せて境内の松の神木に導き鎮座していただくのである。次の早朝境内に盛大な祭壇を設けて祭礼を行う。祭礼が終わればただちに常世の国へお送りするのである。

数多くみられる海の祭りも、執り行うものの心情によってさまざまな色あいをおびる。
新湊のぼんぼこ祭りは、今年の豊漁を願う予祝祭であり、入善町吉原のえびす祭りは北海道へ出漁する家々へ加護を祈る家祈禱である。

法土寺町獅子舞

黒部市生地のえびす祭りもやはり家祈禱ではあるが、その他えびす神が船に乗り、沿岸の漁場を祈禱してまわるのである。
今年の漁業のしめくくりとして感謝祭の形式のものは、新湊の築山・魚津のたてもん・経田のえびす迎えなどがある。また、祭りの折りの神への饗応の仕方にもそれぞれ独特の工夫がこらされている。

魚津のたてもんは「神にたてまつるもの」がちぢまって「たてもん」となったものである。神にたてまつるものとはお供えのことで「にえ」とよぶ。

魚津浜は古くから贄の浜とよばれていた。現在も贄町の町名があり、また北鬼江の地名は、漢字は異なるが「御贄」の名残りである。

古い頃から、信州（長野県）の諏訪神社から神前へ供える「お贄」の為の魚を買い求めにきたものである。はるばるやってきた人がお贄の豊かにとれる浜ということから「御贄の浜」の地名がついたのである。

その昔魚津浜に漁業を始めた人たちが、毎年豊漁を祈って舟に沢山の贄と献燈を積み、浜辺をひいて行き神前に奉納したのである。その後生魚にかえて、多くのあんどんに魚の絵を描くようになった。

更に、贅を高く積みあげた漁船の形に神燈を飾り、現在のたてもんになっていったのである。たてもんの最上にあるあんどんは太陽の神を象徴していて、神の贅にとりつこうとする悪霊を睨み追い払うためのものであり、また、そこから杖垂れている髯篭はその太陽の放射する光である。

祭りのクライマックスであるたてもんの引き回しは、神に心をこめた贄の山をとくと見ていただくための方法なのである。

(2)ぼんぼこ祭り(新湊市)

いまから400年前の1580年(天正8年)に始まったと伝えられる新湊市西宮神社のぼんぼこ祭りは、平成2年4月19日に新湊沖合で行われた。

この祭りは不漁の年であったり、海難事故のあった翌年の4月の例大祭に行われる。ぼんぼこ祭りを行うか否かは宮総代と漁業組合の代表者で決める。

御座船は大漁旗や紅・白・青の吹き流しで飾られている。袴に白だすきのいでたちでえびす様の像を御座船にうつし、十数隻の供奉船がこれにしたがって沖に向う。

海老江沖と高岡市国分沖の漁場で石のおもりをつけた祈禱木を海に沈める。

そのあと包丁式で鯛・野菜・果物の刻んだものを海へまいて海神に供して豊漁を祈り、、船上で、笛・太鼓・ほら貝にあわせて、天狗がぼんぼこ舞を奉納する。

この天狗はえびす様の使いだとされている。じゅばんにたっつけをはき、長い白布でたすきを後で蝶結びにし、烏帽子をかむり、長いひげの面をつける。

更に、背帯爵吼(しゅくこう)の鬼面といわれる腰当面をつける。目玉が動き、むきだした2本のきばは憤怒の形相をみせていて悪魔払いにふさわしい面である。

天狗は弓を釣竿にみたてて鯛を釣る所作をする。「このように沢山の鯛が釣れますように」との願望をえびす神の目前で直接に演出することによって神意を得、その祝福にあずかろうとするのである。そのあと弓に矢をつがえて放ち、悪魔払いをする。

沖合での祭りを終え陸へ上がった一行は船主の家々をまわる。紋付き袴の青年たちが、青竹のササラで家の腰板や格子戸、雨戸、地面を力まかせにたたいて悪霊を払いながら「はいったぞー、はいったぞー」と声をはりあげて、えびす様を家へ追いこむ仕ぐさをする。

ついで天狗が土足のまま玄関から畳の間に上がりこみ、床の間のえびすの掛け軸の前で豊漁を祈って舞う。ぼんぼこはこの時の楽器の音からぼんぼことよばれるようになったらしい。昔から泥足で家の中へ入り、汚れが多いほど豊漁だといって喜ぶ。豊漁と厄除けを祈願する漁民の切実な要求がこの運なおしの予祝祭を生んだのである。

(3)えびす祭り(黒部市)

黒部市生地は海沿いの細長い町で、かっては漁業を専業とし、沿岸漁業のおとろえた明治初年から北海道の出稼ぎ漁業が多くなった。

出稼ぎは年2回で、春漁は3月末に出かけ、8月始めに帰郷する。秋漁は9月初旬に出かけ、11月に帰郷する。漁家に人々のそろうお盆に近い8月18日にえびす祭りが行われる。18日の夕方、新治神社に安置されていたえびす、大黒の神像は満艦飾の御座船に遷される。えびす神は2mたらずの柔和な顔つきの座像である。

港に勢揃いする大小の漁船は大漁旗や色とりどりの豆電球で飾られ、廻旋橋が開くと、御座船を中心に次々と海へくりだす。笛・太鼓の音も賑やかに生地沖を巡幸し、夜の海を染める。

戦前は長い海岸線に沿って8つの漁場がひろがっており、漁場をもつ網元が15軒ほどあった。

西端の神明町の民家を御旅所としたえびす神はその浜辺から御座船に乗船され、8つの漁場を次々に祈禱して回り、最後に芦崎の浜にお着になる。網元がそれぞれ家紋の付いた高張りちょうちんをかかげて出迎え、海辺にある西の宮神社までお伴したという。

現在の生地沖の巡幸はその名残りである。

昭和15年頃まで、この夜、子供達が各町内の浜辺に集まって「かまど」をつくり、煮焚きをする習わしがあった。
浜辺の石を組んで作ったかまどで夏野菜を煮たり、かたくり粉の水溶きを煮たりして、大人たちにも食べてもらい、浜辺一帯は子供の歓声が湧いたものである。
今は市内の商店から寄せられた大小の花火が打ちあげられ、市内外の見物人で浜は賑わう。
本祭りの夜にしばんば踊りの町流しがある。「しばんば」は薪にする柴を運ぶ老女、つまり「柴姥」を歌ったもので、おだやかで素朴なメロディーと身振りを持ち、近隣の町村にはなく、生地のみで歌いつがれてきたものである。

姐まいさどや錨のはだこ　質においても流りやせぬ

七七七五調の即興歌が付され、笛、尺八、太鼓の伴奏で踊られた。昔は深笠や頬冠り、女装、男装でどこの誰ともわからぬ姿で踊ったという。

これは海の彼方の常世の国からあらわれた「まれびと」の姿であり、現世の人と常世の人が一つになって踊るという心性によるものである。現在は老人会、婦人会、小学生の男女がいりまじり、女は揃いの浴衣、男ははっぴ姿で町の両端からふたてにわかれて町流しをする。伴奏も三味線が加わり踊りも華いだ振り付けとなった。

(4)えびす祭り(入善町)
8月26、27日は入善町吉原神社のえびす祭りである。村人は沿岸漁業を生業としている。
また明治以前、北前船の寄港地で、黒部扇状地帯の穀倉地をひかえて米やわら製品の積み出しが盛んであった。
神輿はこの北前船を摸したもので、長さ4メートル、重さ400キログラム、赤・黄・褐色に塗られ、舳には「恵比寿丸」と墨痕あざやかな幟を立てる。船の中央の屋形の前には朱塗りの鳥居、船端(ふなべり)には10箇の高張りちょうちんをつるし、船の周囲は波しぶきをあしらった幔幕を張りめぐらし、帆を高く張る。

宵祭りの渡御は夕方6時、担ぎ手は42才の厄年の人たちである。神輿が社を出立する時、音頭取りが「柱起し」を歌う。帆柱を立て、帆を張って出航する際の歌である。

帆は法華経の80巻　よいとな-

荘重な節回しにつれて屋形船が立ち上がる。屋形船の巡幸中は航海中の歌として「櫂節」や「あかとり節」が歌われる。「あかとり」とは船の内へ入った水をかきだすことである。

出船可愛いや入船よりも　入れて出船がの-なけりゃよい
よいよいありゃりゃんこりゃりゃん　よ-いとな-

囃子のとき、担ぎ手が船を上下左右に揺すり、またいっせいに地をけって飛び上がり、船が大波にもまれる様子を表現する。
祓(はらい)を受ける家は、以前は網元の家々であったが、現在は今年新築した家、嫁を迎えた家である。
それらの家へ神輿をおろすことを錨をおろすという。庭では花笠音頭、小原節の踊りが演じられ、集まってきた人々に酒、肴、重箱詰めの馳走がふるまわれる。

大皿には刺身と鯖の押しずしがうず高く盛られる。大盃についだ酒や一升びんの回し飲みなど、客に酒を強いることが馳走とされている。

(5)えびす迎え(魚津市)

魚津市経田は漁業を専業とし、明治初年から北海道方面に盛んに出漁した町である。

昭和36年頃まで、毎年11月20日になると、寒くなるので帰郷されるえびす様を迎える祭りを行う家があった。

その晩は、どっさりお金を稼いで北海道から帰られるえびす様のために、ご馳走をこしらえ、玄関の大戸をあけて待つ。神棚の下に客用の座布団を置いた神座をしつらえ、お膳をすえる。

ご馳走は2匹の生鯛、神酒、小豆飯、おつけ(魚の入った豆腐汁)、おひら(山菜、野菜の煮しめ)鯖や鰯の押寿司である。灯がつく頃えびす様がおつきになる。

トート(主人)が「今年はおかげで沢山もうけさせてもらって有難うございました」と心の中で唱えながら神酒をつぐ。ご膳をさげたおさがりは家族そろっていただく。

1月20日は、ふたたび北海道へ旅立ちされる日で、やはりご馳走をつくり「どうぞ今年もまめで稼がせて下さい」とあいさつして、えびす様を早朝にお送りする。

この日に親戚の人々を招待して小豆粥をたべる習慣があった。粥の中へ古銭を型どった団子を入れ、今年もこのように金をもうけさせていただきたいと願ったのである。

おわりに、1年の最初は、本年の豊漁と厄難よけを願う予祝祭としてのぼんぼこ祭りにはじまる。夏には海の幸を満載して神前に捧げる魚津のたてもん祭りとなり、また黒部市生地や入善町吉原の浜では春の漁の感謝と、秋の出漁への願いをこめたえびす祭りが行われる。

秋には放生津の築山神事があり、ついで経田のえびす迎え等、1年間の豊漁と安全を守護し給うたえびす神への感謝祭でしめくくる。

このように、えびす神は1年の中、幾度か常世の国、海底の国、遠い海の彼方等からあらわれ、海浜の人々の生活と生業を守る神として古くから信愛されてきたのである。

富山湾沿いの家々の神棚には、海中から拾いあげたり、地曳網にかかった像や石をえびす神として祀る例が少なからず見られる。こうしたえびす神の信仰的背景には、海を渡り
くるもの、海より出現するものを聖なるものとする古い考えが潜在するのである。

漆間　元三(うるま　もとみ)・富山県文化財保護審議会会長
-平成6年2月26日放送-
富山県民生涯学習カレッジ本部 - テレビ放送講座(県民カレッジ 主催講座)
Fax　076-441-6157／Tel　076-441-8401
「えべっさんがござった」　～海の祭り～

6. 参考資料02

第1回 日本海学講座「北前船の伝承を探る」1999年度 日本海学講座1999年6月12日新湊市農村環境改善センター講師　漆間 元三富山大学講師対談　荒木菊男新湊市文化財審議委員

(1) 北前船

北前船米を積み荷として北海道を目指した。佐渡へ行って西南西のワカサ風が吹くと3日で北海道に着いたという。

佐渡～粟島～飛島と北上し深浦港で認定証をもらった。深浦には200艘並んだ。船頭が問屋と直接交渉し、契約が成立すると鰊肥を積んでアイの風を待った。

風にさえ乗れば帰りも3日で帰れた。経済性を競って風待ちをした。3月～6月が1回目、6月～8月が2回目の交易となった。

乗組員は船主、4～5人の正式乗組員、あとは日雇いであり、この日雇いの採用希望者は多かった。理由は収入が良かったこと（農家の3～4倍）。船主の家の草むしりをするなどご機嫌をとりながら、採用されるように努めた。

商談をまとめるために青森、江差は勿論福島まで行った。持ち帰った鰊肥を売り現金化した。この漁肥が富山の農業を支えた。

「明治末から大正期に撮影した北前船」

風の力風が大切であった。越中漁民が北海道に移住したのも風の影響が強いと考える。　明治18～19年の不漁の年、小船5～6艘で組んで北海道へ行った。

ムシロ帆で陸を右に見ながら進んだ。風を受けるために帆に水を絶えずかけて、帆をぴったりと濡らした。

漁群を探し、陸で売りさばいた。太平洋の三陸へ。宮崎浜の漁師がムシロ帆で千葉まで行ったという。

輪島の舳倉島は鮑の生息地である。鮑を取る海女・海士12人が福岡の宗像郡鐘ケ崎から永禄年間にやってきた。海に境界線はなく、彼らは鮑の生息地、販路を求め韓国までも隣感覚で行っていた。宗像から能登に来たのは獲物と風の影響であろう。

船住まいから陸住まいへ早い時代の海士たちは、家を持たず、船で暮らし、結婚し、葬式をするというように、漁師は船の上で生涯を終わるものであった。

「船の上に暮らしていた海人は陸に上がったらどうするか」という問題である。

すぐ気付くのは船と漁家の間仕切りである。浜の船と家の間取りが三間縦並列になっている。

漁家も縦並列、片側廊下という住居になっている。町屋にも漁師の船の構造が入り込んでいる。広く沿海州も含め『池』ともいえる日本海の周辺一帯に注目してみる必要がある。

浜のトイレ（汚物）に対するこだわりの希薄性に目をやると、日頃海で用を足せる様式に影響されていることがわかる。

(2) 対談要旨

＜漆間＞弁財船について補足を願いたい。

＜荒木＞地乗り－山をみながら、沖乗り－風に乗る行き方があった。ワカサ風（ワカサモン）を受けるために能登へ。律令時代は能登から敦賀へそこから陸路琵琶湖へと向かった。　その時も風を利用した。北前船の頃は底がヘラ船で荷は多く積めたが早く進まないので、風を利用する必要があった。

＜漆間＞黒部周辺では浜に道路を作ろうとしたら、「なんでおらの土地にタダで作る」と抗議する風潮があるが、新湊周辺の浜に対する所有意識は？

＜荒木＞ここらでも浜に境界を作ったり、浜争いはよくある。大正8年海老江で網争いをしている。砂浜は大切なものだった。

＜漆間＞地面（浜）以外に川はどうだったか？川も船が停まっている所を自分の屋敷だと思っていたか？

＜荒木＞思っていた。杭を打つのも大変だった。川に降りるために階段を作ったりして所有意識があった。

＜漆間＞恵比寿さんについて。

＜荒木＞鯛を抱えた大漁恵比寿、商売恵比寿等恵比寿にも色々ある。

＜漆間＞恵比寿は気ままな、融通無碍な神。死んだ人も恵比寿という。

＜荒木＞恵比寿は流れ仏。コモで包んであげる。

＜漆間＞私は死体恵比寿を見た。2日後に大漁になると聞きそのとおりになった。

＜荒木＞船の神は女だから、女を乗せる時は2人以上乗せた。大漁になると良い女。

＜漆間＞海の神といえばワダツミ（海神）で立派に聞こえる。それに対して、恵比寿はいろいろ派生していく。

＜漆間＞風について。タマ風はどこから吹く？

＜荒木＞南西。魚も来るけど、突風で危ない。

＜漆間＞タマ風－霊魂、悪霊を含んだ風。

＜荒木＞モンの風は亡霊の風。南西の風で9月26日前後。その日に限って大漁になり、船がひっくり返る。漁師は警戒する。

＜漆間＞富山湾は竜宮といえるだけのアイガメがある。アイは藍色の意味ではなく、多くの魚がいる甕と見れないだろうか。

日本海学ライブラリー日本海学推進機構
〒930-8501　富山市新総曲輪1-7　富山県国際課内　TEL:076-444-3156

(3)対談関係資料1
①弁才船(べざいせん)・ 北前船について

「弁才船(べざいせん)・ 北前船ってどんな船なのか。地域によって呼び名が異なります。
弁才船は17世紀前半におもに瀬戸内海で活躍していた船の形です。当時は300石積前後の中型船でした。当初、漕帆兼用船でしたが、このころから帆走専用船となり、乗組員の数も少なくなり、改良がかさねられました。

そして手ごろでつかいやすい船として、流通経済の発達とともに1,000石積、1,500石積と大型化され、全国的に普及していきました。

よくいわれる千石船とは、大型の弁才船をさす呼びかたとして広まりました。
また、大坂(大阪)より木綿、油などの日用雑貨を江戸にはこんだ菱垣廻船から分離して、おもに酒荷をはこぶようになった樽廻船、そして日本海側で活躍した北前船(北前船型弁才船)も弁才船の代表です。

「弁才船べざいせん江戸時代の海運の主力として全国的に活躍した代表的な廻船の船型呼称。俗に千石船と呼ばれたのはこの形式で,弁才造りともいい,一本水押(みよし。1本の長大な部材で構成された船首),三階造り,垣立(かきだつ),艫(とも)やぐら,外艫などに一見してそれとわかる特徴がある。

瀬戸内海を中心に発達した典型的な内航用の船であったが,17世紀中頃から帆走専用船に脱皮し,1本マストの横帆船ながら帆走性能を向上させて経済性の高い商船になった。

そのため海運の合理化を実現し,その技術は全国的に普及して 18世紀以後は廻船といえば弁才船をさすほどになり,さらに 1000石積み級の普及によって千石船の俗称を生んだのです。

菱垣廻船,樽廻船,北前船などもすべてこの船型であり,使用目的に応じた細部の相違があるにすぎない。明治以後も,その経済性の高さから西洋型帆船を押え,明治 30年代まで沿岸の物資輸送に使用され,やがて合の子船へと発展的解消をとげていった。

(4)対談関係資料2
①新湊めでた

「古謡　新湊めでた」は、射水市指定文化財になっております。

1.これの恵比寿は　よい恵比寿
　　舟に御宝を　積む恵比寿

2.船の速さは　山のつかいも
　　山の御つかいも　風がする

3.大船のともの櫓に　松植えて
　　松の御風で　船はしる

めでたの由来は、九州玄界灘の海上に浮かぶ、「馬渡島」「(まだらしま)」に生まれた、祝儀歌唄「まだら」が、「出雲、輪島、七尾」と海岸線を黒潮に乗って北上して、ここ放生津に伝わり、江戸時代に「放生津まだら」から「新湊めでた」になったと言われています。

初めは、北前船や能登通い、漁業関係者だけの間で歌われていたが、現代では広く一般市民の間に浸透しています。

「七尾まだら」の碑

九州の「馬渡島」祝儀歌唄「まだら」→「輪島まだら」→「七尾まだら」→「放生津まだら」→新湊めだた」と伝播してきたとすれば、海のルートとして理解は出来ます。

「「七尾まだら」は、能登半島の付け根、「口能登」と呼ばれる七尾は、まさに能登の入口。応永5（1398）年、畠山満則が七尾城を築いた歴史があり、畠山氏は8代、180年の繁栄をもたらしました。

しかし戦国の世、上杉謙信によって攻略され滅亡してしまいます。

そんな歴史ある七尾で古くから歌い継がれてきた祝儀唄が《七尾まだら》です。
七尾まだらの碑◆この唄は大変重々しく、また格調高く歌われています。

演奏会用としては、三味線と尺八の伴奏で歌われます。印象的なのは、地元の人々が紋付袴姿で勢揃いして、手拍子のみで朗々と歌われるシーンです。

また、能登を代表するともいえる5月の七尾・青柏祭では、「でか山」と呼ばれる山車の前で、やはり手拍子のみで歌われます。かつて藩政時代には廻船問屋が、正月11日の「起舟（きしゅう）」に、船頭や水夫を招待して祝宴を催したといい、その折りには大変厳粛にこの唄を歌ったものといいます。

ステージ民謡としての伴奏つきでの歌い方もいいですが、やはりこの唄は手拍子のみで、海の男達の唄といった雰囲気を醸し出しながら、朗々と歌われるスタイルが合うようです。「まだら」という唄は、佐賀県の馬渡島で生まれたという《馬渡節》が元であるといいます。

現在でも能登を中心に北陸には残っており、伝承があります。能登では輪島市の《輪島まだら》《輪島崎まだら》がよく知られています。

また、こうした唄が各地に運ばれ、富山・魚津市、黒部市では《布施谷節》となったといいます。
日本海沿岸の、歌詞の一文字一文字を長く伸ばす唄は、この「まだら」の仲間であるように言われています。

七尾の街を歩くと、「七尾まだら」の碑が目に入ります。また、追分のような譜もありました。やはり七尾の人々にとっては、大事にされていることがうかがえます。

この唄は、大変産み字を長く引っ張って歌われますので、ただ聞いていると歌詞の意味を聴き取ることが難しいほどの曲です。

しかしメロディは大変おもしろく、また海の唄らしく、波を思わせるような独特なメリスマティックな歌い方が独特です。また歌詞の生み字とは別に合間に入ってくる「エヨエーエヨ」といった独特な歌い方が面白く、また歌詞の聴き取りづらさでもあるように感じさせます。地元以外の人にはなかなか歌えない難曲だと思います。

このようなルートで「獅子舞の情報」も伝播したのかもしれません。

7. 獅子舞記録写真集01

2019年（令和元年）5月3日高岡市「獅子舞大競演会」

2019年（令和元年）5月4日　北日本新聞

迫力の獅子舞 くぎ付け

高岡 大競演会に6団体

たかまちまつり第44回高岡獅子舞大競演会は3日、高岡市中心部で開かれ、市内外の6団体が地域で伝承する迫力の演舞で来場者を楽しませた。　【webunに写真5枚】

立野東町青年団（高岡）、法土寺町獅子舞保存会、四十物町獅子方若連中（射水）、大塚獅子舞保存会（富山）、国吉光徳保育園、和田保育園（高岡）の6団体が出演。ウイング・ウイング高岡広場と末広町商店街「すえひろーど」、高岡大和横に舞台を設け、それぞれ1回30分間で演目を披露しながら3会場を巡った。太鼓や笛のはやしに合わせて威勢の良い声を響かせ、てんぐと獅子が激しい動きで舞った。

関連イベント「たかまちアイドルフェスタ」を初めて企画し、「IMZip」「富山PRガール（仮）」「岐阜♡濃know姫隊」の3組が盛り上げた。津軽三味線の演奏や長さ70㌢のたい焼きを作る実演会などもあり、大勢の人でにぎわった。イベントは「たかまち街づくり協議会」が主催した。

◇

この記事は、webunで会員以外の方もご覧になれます。

たいまつを手に迫力の舞を披露する法土寺町獅子舞保存会＝ウイング・ウイング高岡広場

8.獅子舞記録写真集02

9.編集後記

地元「新湊」には、獅子舞に関する資料は、あまり残ってはいないようである。自分の調査不足もあろうが、もっと捜索しなければなりません。
獅子舞各町内は、殆どが「口伝え」が主であり、資料的なものは残存していないようである。

もし、過去の資料をお持ちの方がおらましたら、是非一度お見せ願いたいと思います。

獅子舞は「舞踊り」とすれば、その「舞のストーリー」が在るはずです。その「ストーリー」が見ている人々に伝えなければ「獅子舞」とは言えないと考えます。

「春には豊作を祈願して、秋には五穀豊穣に感謝」して、各地区の祭りで受け継がれる獅子舞が演じられ、家々を廻ります。

新湊地区の獅子舞は、何と言っても「海上安全・大漁祈願・商売繁盛・家内安全など」を邪魔する「悪魔払いの獅子舞」で在りましょう。「これらを祈念し神社に奉納し、神々に慶んでもらい、家々を廻る」このことが、「獅子舞の由縁」であります。

具体的には、人々に害を及ぼす、数々の「悪霊」を飲み込み、お腹一杯になった「霊獣獅子」は、今度は人々が祈りを捧げる「幸福なるため」の行動を起こすため、「天狗・三番叟・キリコなど」の力を借りて、獅子の身体から「悪魔を追い出す獅子の舞」を「新湊の獅子舞」と言うのではないだろうか。

「古代オリエント地方・古代のインド・古代の中国・古代朝鮮」と伝播して来た中で、その時代、その地域の王様や指導者達は「ライオンを守り神とした信仰」を生み出し、「獅子舞として表現」され、育まれてきたのでしょう。

この地域に伝承される「獅子舞」を、これからも「守り育む」には、そこに住む人々の理解と情熱が必要です。若連中の「意気込み」に期待したいし、1人でも多くの応援もお願いしていかねばなりません。

法土寺町獅子方若連中／2019年（令和元年）5月3日高岡市「獅子舞大競演会」

参考文献

1.新湊市史/石川県七尾市／佐賀県
2.フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
3.日本文化いろは事典
4.オマツリジャパン
5.柴田　稔　能楽師観世流シテ方
6.新湊観光協会
7.日本海学ライブラリー日本海学推進機構
8.富山県民生涯学習カレッジ本部
9.新湊市教育委員会
10.首里城公園管理センター
11.コトバンク出典　ブリタニカ国際大百科事典
12.公益財団法人「日本海事広報協会」

おべっさん　　**「獅子舞」雑考**
作成／2022年/12月/22日
2023年/04月/12日
協力／法土寺町獅子舞保存会／法土寺町自治会
編集／桧物和広　Kazuhiro　Himono
富山県射水市立町12-5　TEL0766-84-8150
https://www.houdoujimachi-imizu.jp/
e-mail　himokazu@nifty/com